

博物館だより



昭和30年の高岡市末広町通り
photo by JIMBO SEIGO

特別展に寄せられた声

博物館の仕事には、企画展・特別展などの開催のほか調査研究事業や資料収集と保存、教育普及事業があります。そして、これらのなかでも学芸員による調査研究活動は、その博物館運営の基礎となる最も重要な仕事です。

それは、歴史・民俗・美術などの実物資料を調査するだけではなく、市民ニーズに即した活動目標(理念)を正確に把握することです。

近年、暮らしのいろんな面で価値観の転換がはじまり物から心の豊かさへと人々の意識が移りつつあります。加えて高齢化社会と情報化社会の到来で、人々の暮らしが急速に多様化しつつあります。そして博物館への人々の期待や要望も多種多様なものになってきました。

しかし、博物館ではどれほど人々のニーズをつかんでいくのでしょうか。

よく博物館案内などに「市民ニーズにもとづいた開かれた博物館」などとうたわれています。そして「アンケート」を取ったり、「友の会」などを組織し、広く市民ニーズを博物館活動に組み込むよう努力されています。

学校から 地獄と極楽 安居 登

本誌でも取り上げられた「地獄と極楽」展の会場が学校の近くだったので生徒を連れて見学をし、感想を書いてくる宿題を出した。この企画展は、高岡近在にある地獄極楽に関係する像や絵を集めて展示してあったもので、「仏教図像にみる信仰のかたち」というサブタイトルがついていた。展示内容は地獄堂の像や『往生要集』をもとにした地獄極楽絵図などである。私自身も地獄絵は余り見たことがなかったので興味深く見せて頂いたのだが、正直言ってこれを現代の高校生がどのように感じるのか分からなかった。見学したのは二つのクラスで一つは何の子備知識も無いままに、もう一つは『往生要集』の一部を読み簡単な解説をしてから見学に出かけた。以下は予備知識の無い方の感想文。

Mさんの感想。「地獄と極楽」を見学して、私は今の時代・世の中を物語っているものだと思います。私たちは今まで何不自由なく育ってきました。例えば、洋服を身につける、食事も満足に食べられる、苦しみや痛みを知らずに生きてきています。それに今の日本はいろんな面にしても発展してきています。すべてが満ち足りていて地獄のように苦しみもなく、痛みなどもない。常に私たち人間はただでさえ極楽に立っているのにさらに極楽を求めようとする。「極楽ばかり求めすぎたら地獄を見るぞ!」ということが、私はあの絵から感じ取りました。とてもカラフルな色彩でしたが、あの色彩が汚れないように今の時代を見つめ直していきたいと思いました。

Nさんの感想。昔は天国と地獄を信じていたけれど、最近あまり信じていなかった。今日高岡市立博物館で「地獄と極楽」を見学してきて、地獄の恐怖を知りました。自分の今までを振り返ってみると、ウソをついた事もあったので地獄の方が気になりました。死んでから罪を償うのは可哀相に見えました。「地獄と極楽」を見てきて、自分の人生を見直すチャンスになりました。

書いたのはともに金髪の女の子。いつも教室の端に座り、時々鏡をのぞいているような子である。私は彼女らの感

しかし友の会への入会動機の多くは、入場料割引や会員特典を得ることが目的で、市民ニーズの反映という点からは、あまり効果は期待出来ず次第に衰退しつつあるようです。

また、博物館法では学校教育や社会教育などと密接な連携を計るために、各博物館にそれらの機関から選出された委員による「博物館協議会」の設置が定められていますが、これも形骸化してあまり効果が得られず、法規改正の検討もはじまっています。

一般に、博物館活動の成果を計るのに、入館者数があげられます。しかし、この数値からは、学芸員の研究成果や、展示への要望など入館者の声は聴えて来ません。一言で「市民ニーズに密着した博物館」といっても、それは大変難しいことです。

最近当館が企画し開催いたしました展覧会のなかで、比較的反響の大きかった二つの特別展に寄せられました観覧者の声を転載させていただき「市民に開かれた博物館」を考える基点といたしたいと思っております。

想文を読んで、びっくりもし、感動もした。彼女らは自分の問題として地獄絵を見、生き方を考えていた。それはあるいは彼女ら自身が現代に地獄を感じているからなのかも知れないが、私はこのような感想文を書かせる地獄絵の存在は大したものだった。

[平成12年2月1日発行 同人より]

[平成11年特別展「地獄と極楽」]

幽霊よ帰ってきてくれ 萩野 唯七

クーラーなどなかった子供のころ、学校から帰ると川に飛び込み、夕刻には涼しい路地で悪童どもと七夕の支度や地藏祭りの準備、秋祭りの獅子舞のけいこなど一緒に遊び回ったものである。

飽きると、暗い街灯の下で大人(十八歳ぐらいの青年)を中心に車座となって「幽霊話」が始まり、その後、肝試しとして一人ずつ墓場を一巡させて、小さな子どもを怖がらせた。幽霊話の題材は小泉八雲の「怪談」を実在の地名や人名で脚色したものだったが、そのころは暗い土手や廃屋などで「人魂」や燐光などが実際に見られた。幽霊はそれなりに怖かったものだ。

高岡市立博物館で「帰ってきた幽霊」と題して特別展が開かれているのでのぞいてみた。富山県内を中心に能登島、加賀の寺院に伝わる霊気と怨念が噴出する「幽霊図」約四十幅が展示されていて、ものすごい形相で迫ってくる。

幽霊は子孫を見守ってくれる祖先の霊と考えられ、祖先を敬い親とのきずなを強くし、因果応報を説いて悪行のブレーキとして人々の心にすみついていく。

子供たちは青年と遊ぶことによって水泳や木登りを覚え、道具の使い方を教わり、また、けんかもして人間社会のしきたりも学んだ。現代の「十七歳」に、このような学習機会がないのが最も怖い。

北日本新聞 平成12年7月21日 読者コーナーより

[平成12年特別展「帰ってきた幽霊」]

収蔵資料紹介

「網代錆絵四君子器局」

石井勇介作 (1851~1925)

石井勇介は勇助塗初代・勇助(1810~86)の二男として嘉永4年(1851)に生まれました。本名は与三吉。勇助塗の創業に尽力し、分家独立して「勇介」と号しました。

網代を木地に張りつけて地紋とし、錆絵技法や玉石などで模様を立体的に表現しています。蓋には梅と蘭、右側面は竹、左側面は菊、中の引出し表には松が描かれ、勇助塗の技法が随所に発揮された優品です。



平成12年収蔵
大きさ (cm)
高さ 63.9
幅 47.6
奥行 30.6

◆新収蔵品紹介

4月1日~平成13年1月31日現在

購入	分類
瑞龍公世家(大正3年5月20日発行)	歴史
第7回関西府県連合共進会彙報	歴史
越中国射水郡絵図	歴史
牡丹唐獅子文堆朱香合(堀江晃開作)	産業
郷土玩具(6件405点)	民俗

寄贈	寄贈者
服部君行状(扁額)	
和歌書(8点)	
羽咋・鹿島両郡絵図	
鳳至・珠洲両郡絵図	
河北郡絵図	
河北郡絵図	
金沢町絵図	
石川郡十村絵図	
石川郡絵図	
能登半島海岸深淺図	
江沼郡十村絵図	
御宿天野屋伝兵衛家取図	
天野屋由緒書	歴史
婚姻願	長谷川美紀子・青木実二子両氏
大妻への招待状	
服部嘉十郎筆漢詩	
服部嘉十郎書簡(3通)	
宮永菽園書簡	
服部元彰・元濟書簡	
服部たみ子和歌二首	
服部嘉十郎への送辞	
落手書	
服部嘉十郎相嗣願文	
江服留隆書状	
服部家の墓石についての書状	
服部元彰漢詩	
嫁への教訓三ヶ条	

新年筆事	
14代嘉十郎相嗣願文	
三橋六良書状	
原子力平和利用の栄	歴史 妻 遊輝氏
柘植櫛(3点)	民俗 水田市平氏
女白足袋	〃 〃
男色足袋	〃 〃
楠灰懐炉(3点)	〃 〃
楠灰	〃 〃
豊表漆塗り蒔絵高足駄	〃 今井典子氏
豊表漆塗り蒔絵低足駄	〃 〃
六神丸看板	〃 森田眞理子氏
網代錆絵四君子器局	産業
鯛盆(プラスチック素地)	〃 大野 武氏
通携用カーバイドランプのホヤ	〃 〃
西川式吸入器	民俗 佐伯時男氏
京大式蒸気吸入器	〃 〃
細川林谷書簡	歴史 須賀月真氏
佐渡葆斎漢詩	〃 〃
土肥松軒漢詩	〃 〃
浄瑠璃大会プログラム	民俗 〃
浄瑠璃本(尼ヶ崎の段)	〃 〃
浄瑠璃本(合邦内の段)	〃 〃
目録	〃 〃
書見台	〃 〃
浄瑠璃衣装(肩衣・袴)	〃 〃
スチームアイロン	〃
新圧力式電気炊飯器	
保温ジャー	
電気炊飯器	
文化鍋	
電子ジャー	
磁器製電気ポット	
鉄鍋	
うどんふり	

手水	
座蓋	
漆塗り箸箱(2点)	
朱盃(3点)	
箱膳(4点)	
朱塗り櫛(4点)	
ブリキ製米櫃	民俗 日尾清作氏
目籠	
蚊帳	
柳行李鞆	
黒革張りトランク	
張り板(2枚)	
版木(146枚)	
薬研	
コンソール型ラジオ(足付き)	〃 高橋敏彦氏
卓上型ラジオ	〃 〃
覚醒器付錠	〃 望月 保氏
タカチアスターゼ看板	〃 〃
蒸気機関車プレート「C581」	〃 〃

◆平成12年度刊行図録

企画展「高岡城址物語」	A4版 23P 300円
特別展「帰ってきた幽霊」	A4版 47P 700円
企画展「高峰譲吉展」	A4版 7P 100円

郷土の歴史資料などの情報を求めています

歴史資料や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解する上での貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・生活資料などの収集保存を行い展示に生かしたいと思っております。

◆常設展「郷土の暮らしと文化」

4月1日(日)～平成14年3月31日(日)

高岡市は、近世期の開町以来、銅器・漆器をはじめとする伝統産業を生み出し、今日まで商工都市として発展してきました。特に明治期における高岡商家の商業活動は、全国的にみても特筆すべきものがあり、幾多の逸材を輩出してきました。

このような郷土の特性を当館収蔵の高岡の歴史・民俗・産業資料約250点を展示し、郷土の偉人の紹介とともに市民学習の場として公開いたします。

◆企画展「高岡金屋とその周辺金屋」

— 足跡をたどる —

4月24日(火)～6月24日(日)

開町以来、高岡の鋳物師達は、京都の真継家からの許状を持ち、藩の手厚い保護のもとに鉄鋳物に携わってきました。そして江戸中期には北国筋の頭役となり、次第に仏具などの銅器製造も始まり、産地として知られるようになりました。

金屋という地名は、鋳物場のことで高岡周辺にも多くの金屋地名が残っています。放生津金屋・富崎金屋・中居などかつては鋳物業で栄えた所です。

本展は、これらの金屋と高岡金屋との関連を文書記録や伝世された銅鉄器によりその足跡をたどるものです。



大日本物産図会「越中国鉄物細工之図」
明治初期 三代広重作



◆特別展「昭和」— あった、使ったモノ語り —

7月10日(火)～8月31日(金)

明治34年に始った20世紀のうち、昭和の時代はその半世紀以上を占め、政治・経済・科学・文化において人々の暮らしは激変しました。

新世紀のスタートにあたり、昭和はどのような時代であったのかを、郷土の生活資料を中心に検証し、(1)昭和初期から太平洋戦争 (2)戦後から昭和40年代の高度成長期 (3)昭和50年代から昭和の終焉までの3つの時代区分により構成し明日の暮らしを考えます。



◆企画展「郷土の天神信仰」

10月6日(土)～12月9日(日)

高岡近郊では男子誕生の正月を迎えると、画軸や木彫の天神像を飾り初節句を祝います。天神様(菅原道真)は学問の神として広く信仰されていますが、加賀二代藩主・前田利長を祖とする高岡では、前田家の先祖が菅原道真である事から、天神様が早くから新年の行事として信仰を集めてきました。

天神画像や木彫天神はじめ、郷土玩具の土天神など、各地に伝わる天神信仰の形態を紹介し、ともすると薄れがちな節句行事の意味を考える機会といたします。



富山土人形 明治期

◆収蔵品展「くらしの民具」

平成14年1月12日(土)～3月20日(水)

明治・大正・昭和に至る人々の暮らしの移り変わりを当館収蔵の衣食住に関する民具などを展示し、明日の暮らしを考える機会といたします。